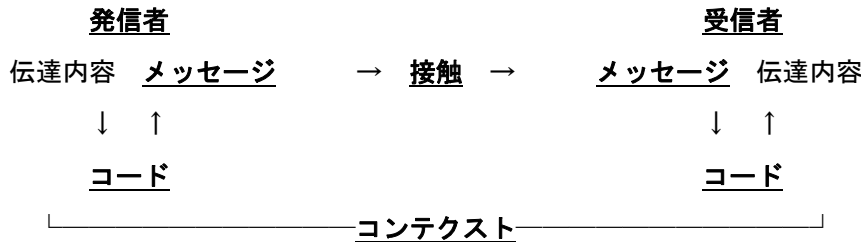


* 「交通・運輸・通信」

- ・通信の前近代：①音声（鉦、太鼓、板木…）、②視覚（旗、狼煙…）、③文字（飛脚…）
- ・通信の近現代：「交通・運輸」からの「通信」の自立、マスメディア領域の肥大化

* R. ヤコブソンのコミュニケーション・モデル（6要素モデル）



* 「つたえる」の4段階

	身体性	一回性／複数性	思考様式	社会制度
①声	身体的	一回性	状況的・具体的	小規模
②筆記	非身体的	一回性	一般的・抽象的	大規模
③印刷	非身体的	複数性	更に一般的・抽象的	想像の共同体？
④電子	身体的	複数性	再び状況的・具体的	地球村？

* 「つたえる」の前近代／近代／現在

- ・メディアの発展は「代替的」ではなく「積層的」
- ・ラザースフェルト「コミュニケーションの二段階の流れ」説
- ・「誰が」「何を」「誰に対して」「どのようなチャンネルで」「どのような効果で」
- ・柳田國男「世間話の研究」(1931)：「ハナシ」と「カタリ」、「形式」と「内容」の不整合

* 文献

マクルーハン 1962 (邦訳 1986) 『ゲーテンベルグの銀河系 活字人間の形成』みすず書房
 オング 1982 (邦訳 1991) 『声の文化と文字の文化』藤原書店
 アンダーソン 1983 (邦訳 1997) 『[増補]想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』NTT 出版
 吉見俊哉 2004 『メディア文化論 メディアを学ぶ人のための15話』有斐閣
 佐藤健二 2012 『ケータイ化する日本語』大修館書店
 日本口承文芸学会編 2017 『こえのことばの現在：口承文芸の歩みと展望』三弥井書店
 菊地暁 2017 「<BBS>の片隅で：身体、書物、インターネット」田中雅一編『侵犯する身体』京都大学学術出版会

は、声の文化にもとづく認識過程 *perceptual process* と、書くことにもとづく認識過程という二つの集合にはっきりと区分されている。読み書きができない者（かれの被験者「面接に応じたインフョーマン」）のうちの圧倒的多数と、すこしでも読み書きができる者とのあいだに示されるもろもろの対比は、顕著であり、あきらかに重要な意味をもっている（ルリアはしばしばこのことを明記している）。この対比に示されていることは、カラザースが報告し、引用している研究でもやはり示されていることである（Carstairs 1959）。すなわち、思考過程における圧倒的な差異が生じるためには、

中程度の読み書き能力があればよい、ということである。

ルリアとかれの同僚は、茶房のくつろいだ雰囲気の中で、被験者たちとながい会話をかわしながら、データをあつめていった。そして、調査の目的である質問を、格式ばることなく、被験者たちになじみのあるなぞかけのようなやりかたで持ち出した。こうして、被験者たちがよそゆきにならなく質問に答えられるよう、あらゆる努力がかたむけられた。被験者たちはかれらの社会のリーダーたちではなかった。しかし、あらゆる点で、かれらを、「社会的に」ふつうの知性をもち、その社会の文化の十分な代表者であると考えることができた。ルリアの調査結果のなかで、以下の諸点が、とりわけこの問題にかかわるものとして注目される。

① 読み書きができない（つまり、声の文化のなかで生きていく）被験者たちは、幾何学的な図形を識別するのに、それぞれの図形に「現実の」諸対象の名前を当てはめることによって、けつして、抽象的に、円、四角形等としては識別しなかった。円は、皿、ふるい、バケツ、時計、月など

と呼ばれ、四角形は、鏡、ドア、家、アンズ乾燥板などと呼ばれた。ルリアの被験者たちは、描かれた図形を、自分たちが知っている実際の事物を表すものとして識別した。かれらが扱っていたのは、けつして抽象的な円とか四角形ではなく、むしろ、具体的な対象だった。他方、中程度に読み書きができる教員養成学校の学生たちは、幾何学的な図形を、円、四角形、三角形などの幾何学的なカテゴリーの名称によって識別した（Luria 1976, pp. 32-39）。かれらは、実生活での反応ではなく、教室用の答えをするよう訓練されていたのである。

② 被験者たちは、四つのものが描かれている絵を提示された。そのうちの三つは一つのカテゴリーに、残りは別のカテゴリーに属していた。そして、そのなかで、たがいに似ているか、一つのグループに属するか、ひっくり返して一語で言いあらわされるようなものがあったら、一つにまとめるようにと被験者たちは求められた。ある一つの絵の組みには、「ハンマー」、「のこぎり」、「丸太」、「手おの」が描かれていた。読み書きができない被験者たちは、グループ分けをするときに、一貫して、「三つのものは道具だが、丸太は道具ではないというような」カテゴリーの観点からではなく、実践的な状況の観点から、すなわち「状況依存的な思考」によって考え、丸太以外のものをすべて「道具」として分類するといったことにはまったく意をはらわなかった。もし道具をもった職人が丸太を見たしたら、かれは、その丸太に対して道具を使ってみることを考えるだろう。そして、風変わりな知的ゲームのように、道具がそのためにつくられているもの（丸太）からその道具を遠ざけておこうなどと考えないだろう。読み書きができない二十五歳の農夫はこう答えている。

「みんな似たり寄ったりだよ。のこぎりは丸太をひけるし、手おのだって丸太をたたき割れる。どっちか捨てろって言うんなら、手おのかな。のこぎりのほうがいろんな仕事ができるもんな」（Luria 1976, p. 56）。ハンマーも、のこぎりも、手おのも、みな道具だときかされても、かれは、そういうカテゴリーによる分類には関心を示さず、あいかわらず状況依存的な思考にこだわっている。「なるほどね。でもあれだよ、道具なんかあったってそれだけじゃどうしようもないぜ。やっぱり材木がなきゃはなしにならないよ。第一それがなきゃ、なんにも建たないだろ」（ibid.）。別の組みの四つのものを、かれはやはりみんなおなじようなものだと考えたが、そのうちの二つを他の人間が除外したのはなぜかと問われて、かれはこう答えた。「きつと、そうした考えかたがその一つの血のなかにあるからだろうよ」と。

対照的に、たった二年間だが村の学校で勉強したことがある十八歳の少年は、おなじように組みになった絵を見せられると、それをカテゴリー別に分類しただけでなく、その分類にけちがつくと、自分の分類の正しさに固執した（Luria 1976, p. 57）。読み書きがからうじてできる五十六歳の労働者は、状況にもとづくグループ分けとカテゴリーにもとづくグループ分けをいっしょくたにしたが、それでも、後者のほうが優勢だった。すなわち、「まさかり」、「手おの」、「鎌」という組みと、「のこぎり」、「小麦の穂」、「丸太」という組みを示されて、後者のグループからなにおきなえば、前者のグループは完全なものになるかと問われ、かれは「のこぎり」を選んだ。「こうすりゃ、みんな百姓仕事で使う道具になるだろ。しかしかれは、それからまた考えなおし、小麦についてこう付

け加えた。「そうか、鎌があるんだからこいつを刈ることだってできるなあ」（Luria 1976, p. 72）。抽象的な分類だけでは満足できなかったのである。

ルリアは、被験者たちとのやりとりのなかで、読み書きができないかれらに、抽象的な分類のしかたの原則をいくつか教えようとくわだてた。しかしかれらには、それを心底から理解することはけつしてできなかった。ふたたび自分の手で実際に問題解決をはからなくてはならなくなると、カテゴリーにもとづく思考ではなしに、またもや状況依存的な思考にかかれらは立ち返ってしまっ（Luria 1976, p. 67）。かれらは、操作的な思考でないような思考、すなわちカテゴリーにもとづく思考は、重要ではなく、おもしろくもなく、どうでもいいものだと確信していた（Luria 1976, pp. 54-55）。「原始的な人びと」（つまり、声の文化のなかで生きていく人びと）が、自分たちの生活のなかで役にたつ獣や草花には名前をつけるのに、なぜ、森のなかのその他のものは、取るに足りない十把ひとからげの背景とみなして、「あれはただの『しげみ』」とか「たんに空を飛ぶ動物」というようにかたづけられるのか、という点に関してのマリノフスキーの説明が思い出される（Malinowski 1923, p. 502）。

③ 形式論理がギリシア文化の発明であることは知られている。そして、ギリシア文化は、アルファベットで書く技術の内面化し、この技術によって可能になった考えかたをみずからの認識手段の恒久的な一部としたのちに、この形式論理を発明したのである。この点を考えると、三段論法にのっとって形式的に推論を積み重ねていくという点に対して、読み書きができない者がどう反応